当別新聞以後

「当別新聞以後～状況から・状況へ」
企画室

〒001－0021
札幌市北区北21条
西8丁目2－20－
604　清水方
☎0115770161
編集人
清水　三喜雄

ブログアドレス
smikio1948.org/mikio/
メールアドレス
9891 oltg@jcom.zaq.ne.jp

劉連仁生還６０周年記念集会ＩＮ当別

劉　連仁

りゅうりえんれん
（1913～2000）

貧しい農民だった劉連仁は、戦時中、中国山東省から強制連行され沼田町の鉱山で過酷な労働を強いられた。終戦直前に脱出し戦争が終わった事も知らずに、北海道の山中を彷徨した。１９５８年当別の山中で袴田清治さんに発見され奇跡の生還を果たした。１３年の歳月が経っていた。無事祖国に帰った後、１９９１年、９５年、９８年と来日し、当別町民と親交を深めた。劉連仁が逝去した２年後「日中友好の願いを込め」当別町内外の草の根運動によって劉連仁記念碑が建立された（２００２年）。その後、劉連仁記念碑を伝える会（大澤勉会長）が発足し、記念碑を守り、戦争を語り継ぎ、日中友好の活動を続けている。毎年全国各地から様々な団体、個人が記念碑を訪れ、伝える会と交流している。

劉連仁が生還してから六〇年の歳月が経つ。この節目の年に六〇周年記念集会が八月二六日（日）劉連仁記念碑前で開かれ、「旅システム」のツアー参加者や当別町民らが合流して近年にない規模の集会となった。

集会では、大澤勉会長（記念碑を伝える会）が劉連仁「発見」の経緯から記念碑建立などの歴史について説明し、劉連仁が北海道の山中で何度も自殺未遂したことに触れ、ここで死ねば家族も日本人も誰も何も知らずに埋もれることになるんだ、生き抜いてやると決意したという本人の証言を受け、「伝える会」は劉連仁の思いを次の世代へ語り継ぐ責任があると語った。

当別町長代理で出席した本庄幸賢当別町教育長は、記念碑は町民の浄財で建立されたもの、町としても大切に管理していきたいと挨拶し、こう語った～歴史を学ぶという事は未来への確かな一歩である。台風一過の今日の青空、劉さんもこのような青空を見ただろうか、と。

日中友好協会の鴫谷節夫会長（北海道支部）は、全国に強制連行され亡くなった人々を悼む記念碑はたくさんあるが、生還して祖国に無事帰る事が出来て、その後草の根交流の中から生まれた記念碑はここだけです、と話された。

◆

その後参加者たちは、若葉町会館（隣りが劉連仁を「発見」した故袴田清治宅である）に移動して交流を深めた。交流会では、児童文学『生きる～りゅうれんじん物語』を書いた森越智子さん（函館市）が講演し執筆の背景などを語った。同書は読書感想コンクールの課題図書になり、寄せられた中学生の感想文などを披露した。その受けとめ方の鋭さ・確かさは、ある希望を抱かせるものだった。地味で目立たない「伝える会」の持続的な活動が広げてきたすそ野は意外と広く確かなものだ、それなくして森越さんの作品も生まれなかったな、と感じさせた。

◆

劉連仁は一九九六年、日本政府に謝罪と賠償を求めて提訴した。一審で勝訴するも最高裁で敗訴した。その裁判記録を劉連仁弁護団の弁護士事務所（東京）を訪れ閲覧していた時、一枚のカルテ「写」を見つけた。一九九八年高密市人民病院を受診した劉連仁のカルテである。それは衝撃であった。

「深山恐怖に伴う四肢関節の疼痛、四〇年の下痢」とあって、こう書かれていた～《患者は長期にわたり、日本の北海道の無人の湿度の高い環境下に居住し、長期間飢餓状態にあった為、夜間の夢が多く、悪夢を見る。山水樹林の環境に触れると恐怖を感じ、パニック症状を起こす。多くの治療方法を施すも効果なし。》

この二年後に劉連仁は逝去する、八七歳である。つまり劉連仁は生涯にわたって戦争の悪夢にうなされていた。戦争の傷痕は、中国の田舎の貧しい農民だった劉連仁に取り付いて喰い込んでいた。アジア太平洋戦争で日本人は兵士も含めて三一〇万人が死んだとも、日本の侵略によってアジアで二〇〇〇万人以上が死んだとも教えられるが、あまりにも途方もない数で、我々は現実感を持って受けとめる事が出来ない。その思考停止の間隙をぬって「戦争の風化」が進むし、それを静かに狙っている人達もいる。そうした中で、劉連仁を生涯悩ました深山恐怖症と悪夢に思いが行けば、我々は戦争のリアルへの糸口を掴む事が出来る。

劉連仁記念碑がもつ「磁場」とは、そのようなものである。

（S）

当別短歌会詠草

八　月

絵手紙にアジサイの花涼しけに友よりエール暑さに勝てと
雲流る低きは東に走り去り高きは西にゆうゆう渡る
浜益の白く泡立つ海原に海鼠獲る舟一艘ゆけり
明けてゆく濃き蒼いろに空は澄み下弦の三日月光り止まざり
夜の更けて月下美人の三つ開く観客はただ吾ひとりのみ
インゲンをくるみいただく新聞にオウム7人死刑の活字

当別散策

親子展と風街カフェと

丁度お盆の時期。札幌から地方に向けて道路は帰省の車の列。しかし当別市街に入ると途端に人も車もいない。寂しいような懐かしいような。当別神社のお祭りで夜には花火大会があるという立て看板も寂し。さすがに、当別駅前のふれあい倉庫に行くと、採りたての野菜を求めて賑わっていた。多目的ホールで、小竹順子さんの「親子三代展」が開催中だったので観る。小竹さんの水彩画は、数年前大澤勉・碓井威夫さんとの水彩画三人展で見て、その丁寧なタッチで印象に残っていた。今も描き続けているようだ。

小竹美月「狩りをする狐」

「枯れたものたち」など十一点ほどが展示されていた。娘さんの写真とともに孫にあたる美月さんもおばあちゃん譲りの精緻な筆致でイラストのような作品を展示して、親子三代展である。「狩りをする狐」は少しシュールで面白い。

風街カフェ

人通りのない中、白樺町の方へ車を走らせる。エコアパートなど熱心な取り組みをしている大澤俊信さん（ビヨルクとうべつ代表）がカフェを開いたという案内を頂いたから。民家を改造したカフェ」が当別は年中街で、その四季を生きとともに、ネイミング今のところ日だけのKで古民家という番組がそれを思わ内装。さって気持ちには、様々由に描かれ「フロアーと云うそう訪れた客がボクも一票た。「今日せランチ」た。コリンでも食べらい南瓜？）スが効いた詰めたもの豊富に。野地元のもの味で身体にドリンクとが付いて六品た。

お盆休暇喧騒を他所気配さえ感静かな静かを過ごす。

韓国文在寅大統領の外交政策アドバイザー金基正教授の講演

韓半島からの平和メッセージと東北アジアの未来

米国と北朝鮮の挑発合戦で戦争の危機が現実味を帯びていた昨年に、いったい誰が今年に入ってからの朝鮮半島情勢の「劇的展開」を予測しえただろうか。四月の金正恩委員長（北朝鮮）と文在寅大統領（韓国）の会談。六月の金正恩委員長（北朝鮮）とトランプ大統領（米国）の歴史的会談。北朝鮮の「非核化」、朝鮮戦争の「終戦宣言」、北東アジアの平和的な安定へと大きな筋道の入り口に立った。北東アジアの「古い対立図」は根底から崩れ、新たな秩序の形成に向けた胎動が始まったとも云える。この劇的な変化を前に、ひたすら米国に追随し、自主的な平和の戦略を持たない旧来型の日本外交路線の限界も露呈した。米国の袖の下から、北朝鮮への圧力一辺倒の拳を上げていた安倍政権は、トランプの「対話」路線に、拳をどう下ろしたらいいのか戸惑い苦慮している。北朝鮮のミサイル発射が、支持率低下の安倍政権を結果的に助ける「北風」となっていた。「朝日新聞」〈社説余滴〉は、《だが対話基調の下、もうそんな「恩恵」は期待できない。・・・北朝鮮との間の懸案は、他人任せでは解決しない》と指摘した。無論、敵対的な「現状維持」状況や政産軍複合体体制なかで巨大な利権を貪っている勢力やそれに連なるマスメディアからの猛烈な「巻き返し」が執拗に起きている。利害関係のある諸国からの「懸念」もある。その後の事態の展開が停滞しているように見えるなかでの「失望感」という名の足引っ張りもある。

しかしながら、朝鮮半島をめぐる既存のパラダイム（冷戦型）から平和パラダイムへの変化の動きは、後戻りできないのである。

この間、最も目覚ましい動きを見せたのが文在寅大統領だった。その「本気度」と「真剣さ」は日本人にも鮮やかに印象付け感じさせた。文在寅とは何者なのか、何を行動の指針にしているのか。文在寅の側近で前韓国大統領府国家安保室第2次長だった金基正教授（延世大学）が来道し講演会を開いたので聴きに行ってきた。

◆

八月二七日（月）札幌グランドホテルで開かれた講演会は駐札幌大韓民国総領事館が主催し、金基正教授の講演の標題は「韓半島から平和メッセージと東北アジアの未来」。約二時間の講演だった。既に、雑誌『世界』（岩波書店）の論文や「朝日新聞」のロングインタビューなどで話されているが、そのテーマは多義に渡り理論的な整理も易しくはないが、文在寅政権の「構想」が見えてきた講演だった。文政権は北朝鮮問題に主導的に関わって「韓国が運転者になる」と拘って来たが、その意味を金教授は韓半島の運転者論として、「提案者（東北アジアの平和、韓半島の平和）」「仲介者（南北、米朝会談の誘い水）」「促進者（南北関係改善は米朝会談の付随効果ではない、非核化促進の動力だ）」の三つの役割で説明して見せた。

朝鮮戦争で分断された朝鮮半島（韓半島）は、国際政治の関ぎ合い（国際政治軸）と同じ民族の関ぎ合い（民族軸）が今日まで続いてきた。いまだに「冷戦思考」から抜け出せない状況である。それは日本も同じで、歴代政権は自らの権力維持のために故意に「冷戦思考」を煽って来た。

文大統領の目覚ましいのは、この「冷戦思考」に正面から本気で異議を唱えたことにある。いったい軍事対立は何をもたらしたのか、何を解決したのか、結局、現状維持でしかないではないか、と主張する。昨年までの米国と北朝鮮の挑発・瀬戸際外交は、戦争の危機を現実のものにしたし、もし米朝戦争になれば韓国は甚大な被害に見舞われる。ピーター・カズニック教授（アメリカン大学）はこう指摘している～《韓国のソウルとその近郊には二五〇〇万人が暮らし、北朝鮮との軍事境界線までわずかに三〇マイル（約四八キロ）ほどです。ひとたび戦争になれば、核兵器が使用されなくても、初日で最大一〇〇万人の死者が出ると推計されています。》現実味のあった戦争の危機のなかで、果敢に想像力と構想力を働かせた結果が、昨年から今年にかけての文在寅大統領の対話と行動、外交的機動性だったのである。朝鮮半島の非核化は困難で長い道のりだろう。しかしそれ以外に、朝鮮半島の平和的な安定、ひいては日本も含む東北アジアの平和はありうるのか。

文政権の「構想」で極めて注目されるのが、「韓半島新経済地図」である。金教授は、これを「市場としての北朝鮮」と捉え、こう指摘した～《市場での利益共有が安保敏感性を低くする》と。この点でも、日本の経済力とそのノウハウが果たす役割は無限にあるのではないか。

◆

講演後の質疑応答で、いったいトランプと金正恩は「信頼」できるのかという質問が出た。金教授は「信頼」しにくいのは確かと聴衆を笑わせながら、トランプの「政治的なモチベーション」（十一月中間選挙、冷戦体制をコストの面でも変化させよう）と金正恩の「必死的」（核と経済の矛盾激化、対話局面への転換、体制維持）の交錯を楽観的に見たいと答えた。思い起こせば、いったい誰が、一九七二年二月反共極右のニクソン米大統領の突然の訪中を予測しえただろうか。誰が同年九月の保守派田中角栄首相による日中国交正常化を予測しえただろうか。朝鮮半島をめぐる、そして北東アジアをめぐる歴史的なパラダイムの変化の流れは、止めようがない局面に入った。北朝鮮問題の「対話による平和的解決」以外にどのような道があるというのか。拉致問題が解決しなければ制裁解除にも対話にも応じないという日本政府の態度は、この対立を煽って入り口で拒否するための口実と化している。莫大な費用をかけて何の役にも立たず、ただ住民の恐怖心を掻き立てている「Jアラート」の配備などにうつつを抜かしている場合ではないだろう。北朝鮮側には、植民地化の謝罪と賠償を求めるという云い分がある。入り口の対立だけ云い立てて受け身の「外交」では何も解決しない。文在寅大統領の「構想力」と「想像力」から学ぶものは、そこにある。

（清水　三喜雄）

〈本の紹介〉

梯久美子『原民喜～死と愛と孤独の詩人』（岩波新書　2018）

死について　死は僕を生長させた
愛について　愛は僕を持続させた
孤独について　孤独は僕を僕にした
（原民喜『鎮魂歌』より）

原民喜（一九〇五～一九五一）は、広島で生れ、奇跡のように美しい人と出会い愛しみ死別し、その後広島で被爆し地獄図を見詰め生き延び、「見るべき程のものは見て」鉄路に身を横たえて自死した詩人・小説家である。四十五歳だった。原は本書でも活写されているが本当に生活力・世間知というものが乏しく、よくこれで戦中・戦後の混乱を生き延びられたな、とため息がでるほどだ。原には文学者以外の生き方はなかっただろう。杉田水脈自民党議員にならば、原は「生産性」の無い役立たずと罵倒されていたかもしれない。いやいや、そもそも「文学」とは、「生産性」の無い、あってもいいものなのに、それ以外にまた力をもつ、ところに深い不思議がある。原は死に近づいていた作家の追悼の言葉に高はこう述べた～《あなたの地上にこの悲しみの繊細に描きます。そしてほしさ、よろこび、のあなたの悲しみゆらめきとは、芸術つ深い不思議ると。

（3面へ

（2面からつづく）

原の小説のテーマは、子供時代の回想、妻貞恵との死別、被爆体験に大別される。ノンフィクション作家である梯久美子は、この三つのテーマに沿ってしっかりと多くの資料を検証しつつ、原民喜の生涯の全体をよく描いている。文学研究者や文学評論家と違って、文学に肩入れし過ぎずバランス良く、しかしある切実さ・共感も込めて描いているところが本書の特徴である。

妻貞恵を描く原の小説は散文詩のように美しい。よくこのような女性が原の伴侶となったな、と妙な感心をしたりもする。その最愛の妻が一九四四年九月病死する、亨年三十三歳だった。原はこう書いている～《もし妻と死別れたら、一年間だけ生き残らう、悲しい一冊の詩集を書き残すために》。心底そうだろうなと我々を深く納得させる。もし原爆を被災することなくあの夏が過ぎ去れば、一九四五年九月こそが妻と死別して生き残るべき月日の最後の区切りだった。運命は計り知れない。その年の一月まで千葉にいた原は、兄らの伝手を頼って広島に移り住む、《まるで広島の惨劇に遭ふためにに移ったようなものだった。》そして被爆。その惨劇、地獄絵のなかを彷徨する。原は、この被爆の体験の全体を人間としてよくになうために生き延びようと決意する。《愚劣なものに対する、やりきれない憤り》とともに、その勇猛心はどこら来たのかと云えば、まさに役立たずの無力な「文学」の力からだったとしか云えない。

原自身の言葉で～《原子爆弾の惨劇のなかに生き残った私は、その時から私も、私の文学も、何ものかに激しく弾き出された。この眼で視た生々しい光景こそは死んでも描きとめておきたかった。・・・たしかに私は死の叫喚と混乱のなかから、新しい人間への祈願に燃えた。薄弱なこの私が物凄い飢餓と窮乏に堪へ得たのも、一つにはこのためであっただらう。だが、戦後の供瀾怒涛は轟々とこの身に打寄せ、今にも私を粉砕しようとする。》しかし原はよく耐えた、そしてあの『夏の花』三部作など記念碑的な作品によって、原爆の人間的悲惨の全体を後世の我々に未来への「予感」として残し続けているのである。（S）

アイヌ文化普及啓発セミナー開催

「恵庭のアイヌ文化」と「アイヌと縄文」がテーマ

（財）アイヌ民族文化財団が主催する「アイヌ文化普及啓発セミナー」が七月前期・八月後期として一〇講座開かれた。「かでる2・7」（札幌市中央区）で開かれた八月二講座に出席した。二〇日（月）は「知られざる恵庭のアイヌ文化」、二一日（火）は「日本文化のなかの縄文」。アイヌ文化論に新たな照射を当てた興味深い講座だった。

◆

「知られざる恵庭のアイヌ文化～カリンバコタンから本流の岩屋まで～」の講師は、長町章弘さん。恵庭市郷土資料館理蔵文化財担当主査である。恵庭といえば、カリンバ遺跡から出土した縄文時代の圧倒的な漆遺物の「朱色」が鮮明である。日本全国で発掘された「漆」ものの遺物の半分は恵庭から出土している。「漆」の採れない恵庭で何故？長町さんは、漆遺物だけではなく須恵器や北海道古墳（和人の有力者の墓）、そこから出土した刀や装身具など考古学的な見地から、九世紀ぐらいまでの恵庭は、日本海ルートと東北からの太平洋ルートが交わる蝦夷地（北海道）の交易的中心地だったのではないかと推測している。恵庭にある七世紀頃の茂漁二号古墳（柏木東遺跡）から出土した「蝉形の栗形を有する刀」には仰天したことがある。栗形というのは、刀の鞘口に近い位置に付けた孔のある出っ張り。下緒を通し、帯に深く差し込まないようにするもの。この栗形がなんと蝉の形をしている。日本で他に出土の例はない。六月に恵庭で開かれたカリンバ講演会で大沼忠春さん（元北海道教育庁）は、『日本書紀』持統天皇一〇年の条を引用して、この墓を伊奈理武志（いなりむし）の墓であり、刀は持統天皇から下賜されたものだと自説を展開させた。話としては面白いが史料的な根拠は薄い（「いなりむし」とは如何にも虫好きを思わせるけれど）。

恵庭は、他にも考古学的な出土は豊富である。しかし、一三世紀頃からのアイヌ文化についてはあまり注目されていなかった。長町さんのこの日の講演は、そうしたイメージを覆すものだった。

恵庭駅と国道36号線の間、旧カリンバ川とトーウイソ川に挟まれた地域（今は住宅地が広がっているが）に、カリンバ遺跡1・2・3（史跡）・4が点在する。発掘すればもっと遺跡が出て来ると思われる。実はこの地域に、アイヌのコタン（村）が広がっていた。その規模は蝦夷地でも屈指のものだ。発掘で確認されたチセ跡（建物）だけで一一九カ所。他に土坑墓（鉄鍋、首や耳飾り・漆器・白磁皿・刀子・太刀なども）、プ（高倉）跡、送り場跡（灰送りなど）、子熊を飼育する檻跡など。注目すべきはチャシ（砦）跡もあった。

ところが近世の古文書などでは、恵庭のアイヌコタンに関する記述はない。この頃までにはカリンバコタンは消滅していたのだろうか。松浦武四郎の記録に漁太や島松など恵庭の記事が出てくるのは一八四六年『再航蝦夷日誌』からである。

長町さんの講演で興味深かったのは、シラッチセ（岩屋）のことである。この地域は、太古の支笏湖大噴火や恵庭岳の度重なる爆発で堆積した凝灰岩が多い。岩山のような凝灰岩は剥離して丁度庇の様な窪みが出来る。この窪みを利用してアイヌは木を組み小屋掛けした。これが「シラッチセ」である。支笏湖と漁川の間で五カ所のシラッチセが発見されている。何をしたかと云えば、そこに寝泊まりして熊狩りをした。そこにはヌササン（祭壇）もあり、簡素なクマ送りの儀式もしたようだ。蝦夷地の他の地域ではシラッチセは発見されていない。講演の最後に、シラッチセの一つである「本流の岩屋」で恵庭アイヌ協会員らがカムイノミ（供養）をした様子を撮影した動画を見せてくれた。

長町さんは、恵庭は民俗資料は少ないが考古資料は豊富だと語っていた。恵庭のアイヌ文化の調査・研究もこれからだ。

長町章弘恵庭市学芸員

◆

瀬川拓郎札大教授

二一日（火）は、「日本文化のなかの縄文」、講師は瀬川拓郎さん（札幌大学教授）である。瀬川さんは『アイヌ学入門』（講談社現代新書）『アイヌの歴史～海と宝のノマド』（講談社メチエ選書）などで従来の狩猟採取民アイヌのイメージを覆して交易の民「ノマド」としてのアイヌ像を考古学の立場からダイナミックに描きだして注目された研究者である。この日のテーマもすでに『アイヌと縄文』（ちくま新書）で考察されている野心的な試みである。

我々は一般的に北海道の近世までの歴史区分として、旧石器時代から縄文時代へ、さらに続縄文からオホーツク文化も重なる擦文時代を経てアイヌ文化（ニブタニ）時代へと続くと承知しているが、その時代区分ごとに人種が入れ替わっていたわけではないから、アイヌは縄文人だったといっても間違いではないが、「アイヌと縄文」を突き詰めて考えたこと、研究されたことはなかった。

瀬川さんは、アイヌも本土人も琉球人も縄文人を共通の祖先とする日本列島人であるという立場から、日本文化のなかに縄文の習俗や世界観（それはアイヌ文化と共通する）をたどるという試みをしている。平地人であることを拒否して縄文の習俗を守り通したアイヌ文化の総体は、弥生文化を選択した日本人にとって、「ありえたかもしれないもうひとつの歴史」だったというのは、刺激的なテーマである。それを精神文化的視点からアプローチせざるを得ないところが、考古学というモノに依拠する立場の研究者としては苦戦するところだ。

この日もスライドで日本列島の「縄文起源の世界観・他界観」を示す豊富な事例を提示した。農耕以前の海民、各『風土記』で描かれる「ワニ」「シャチ」「サメ」、山・川・海の捉え方にみる世界観、修験者の伝説や古代出雲大社の世界観、大山祇神社（今治市）や日吉大社（滋賀）、沖ノ島などを通して縄文起源の世界観・他界観を瀬川さんはこう整理する～《海と山の神が往還する世界、つまり祖霊の世界である山と、生者の世界である海をつなぐ、生と死の循環する世界であり、川は海に帰属し海から続く世界と認識されていた。これは、「川は海から陸へ上がって村の傍を通って山の奥に入り込んでいく生物」とするアイヌの観念と共通していて、古代海民と同じ縄文の世界観だ》と指摘する。

縄文人は、山があり海があり、その間にカミ道と川があるというトポロジーに対して、農耕民からは海が失われた～《海の神は失われ、海から続く世界である川は、海の神に帰属しない「無主地」となって農耕民の世界に取り込まれる。》

瀬川さんの最後に～《水稲耕作と山の「あ…ある不毛な…占めた。さ…は海と山の…クを分断し…日本列島南…いの世界を…彼等にとっ…の世界は、…き「無主地…ならなかっ…いを塗り潰…の境界を生…いく社会。…さを許さず…一を迫る社…は、他者を…としながら…ネットワー…してきたア…民、すなわ…思想を受け…との目に、…どのように…たのだろう…縄文性を…産は、弥生…局は王権に…ぬ人々であ…の人々だっ…し王権は、…つ強い呪術…の力を王権…不可欠なも…取り入れた…国栖、土蜘…だが、縄文…海と山のネ…ク思想は、…という人為…は相容れな…思想だった…

（4面へ）

（3面からつづく）

「縄文とアイヌ」というテーマへの拘りに、このような視座があったのかと受けとめた。ただ、モノを根拠にしてきた考古学者が、このような精神文化的視点からアプローチするのは、心許無いだろうと思う。

かって、国語学者大野晋が、日本語のタミール語起源説を唱え、多くの共通する言葉の事例を積み重ねていったが、決め手に欠いていて批判・非難された時と同様に、この日示された豊富な事例も、「仮説」の域を出るものではなく、野心的な試論は今後も続きそうである。

（S）

「劉連仁生涯記念碑」（当別町若葉）横には、劉さんの故郷高密市の実家にあったアサガオの種子から育てた可憐なアサガオがいっぱい咲いていた。「記念碑を伝える会」の会員らが大切に育ててきたものだ。碑建立の時に植えられた桜の木も見上げるほどになり一六年の歳月を感じさせる。

「ブリューゲル展～画家一族150年の系譜」開催中！

ブルーゲル１世の代表作が１つもないのが残念だった！

羊頭狗肉という諺があるが、ボクにはこの「ブリューゲル展」はまさにそれだった。確かにブリューゲル一族一五〇年の系譜とあって、父・子・孫・ひ孫までの系譜を辿っている展覧会だったが、肝心の父ピーテル・ブリューゲル一世の代表的な作品が一つもない！長男のブリューゲル二世は、父の忠実なコピー画家だし、次男のヤン・ブリューゲル一世は父とは違って花の絵などに特徴はあるが、ボクが観たいのはそういうものではない。スペイン支配下のネーデルランド（今のオランダとベルギーにほぼ重なる）で「異端審問」が吹き荒れた時代のなかで生き抜いた父ピーテル・ブリューゲル一世（一五二五―三〇?～一五六九）の「沈黙」を彼の絵画群のなかから聴きとりたいと思っていたから落胆した。画家一族一五〇年の系譜を辿る作品展の意義はあると思うし古典的な絵画のレベルも高い。しかしボクは、そのような教養的な事には興味がない。

◆

ブリューゲル一世の絵画は、たくさん観なくてもいい。どれでもいい、一作でいい。『バベルの塔』でも『農民の結婚式』でも『農民の踊り』でも『ベツレヘムの嬰児虐殺』でも『絞首台の上のカササギ』でもいい。とにかく細部が素晴らしい、隅々まで観る者を魅了する。だから一点だけでも代表作の実物を観たかった。虫眼鏡で観る様に細部に時間をかけて観たかった。

ブリューゲルは一行も文章を残さなかった。あまり時代の違わないデューラーの著作・手紙など豊富な史料と比べればその違いは歴然としている。生誕の年すら明確ではない。読み書きが充分ではなかったとも云われるが、その絵がもつ知性、同時代の人文主義者たちとの交流をみれば、そんなことはどうでもいい。同時代の証言も少ない。スペインの政治的な圧政と呼応した力トリックの異端審問の嵐のなかで偽装し沈黙したこともあるのだろうか。

ブリューゲルは、「農民画家」だとか「民衆文化の画家」だとか「風景画家」だとか称せられるが、そんな括りで収まるような単純な画家ではない。ボクは『モナリザ』にしても『最後の晩餐』にしてもどんなに名作の誉れが高くても、心を動かされた事がない。ギリシャ神話やキリスト教文化圏で身に付けたものがないから、「宗教画」に興味を持てないのだ。ブリューゲルも「宗教画」は描いている。しかしその絵は主題がどこに行ってしまったのかと思わせるほど不思議な描き方だ。例えば、『十字架を運ぶキリスト』（一五六四年）を観てみよう。いったい十字架を背負うキリストはどこにいるのか。ほとんど、「ウォーリーを探せ！」状態である。夥しい数の農民・民衆が描かれ、彼らの喧騒の間から辛うじて十字架を背負うキリストが虫眼鏡でやっと確認出来る。どんなに宗教的なテーマであっても、ブリューゲルの絵は郷土の風土の上の民衆の喜怒哀楽のエネルギーに満ち満ちていて、それを絵画化している。だからボクは惹きつけられる。例えば神話が由来の『イカロス墜落の風景』（近年、ブリューゲルの作ではないという説もあるが）を観よう。イカロス墜落の神話は教養的に知っているが、だからどうしたという気分だったが、この絵を観れば、なんと暗号じみていて、謎めいている事か。釘付けになる。墜落したイカロスなど、海に落ちて足しか見えない農夫・漁夫・羊飼いは無関心である。絵左前下の岩に置かれた革財布を突き刺した剣は何を意味するのか。謎の死体の頭とは何か。不思議な、しかし惹きつけてやまない絵だ。日本中世絵巻解読など図像歴史学の泰斗黒田日出男教授なら舌舐めずりしそうな絵である。だからブリューゲルの絵を巡っては様々な解釈・論争が延々と続いてきた。

◆

小説家は史料の少なさを逆手にとって文学の想像力を発揮した。中でもボクが好きなのは、ベルギー人作家ヨーン・フェレメレン『ピーター・ブリューゲル物語～絞首台の上のカササギ～』（クインテッセンス出版　邦訳二〇〇一年）である。この作家はジャーナリストでもあり、子供向けの作品も多く、平易でセンスがあり会話が素晴らしい。ブリューゲル像は創作に近いが（漁師ヨッベの肖像など素晴らしい！）、歴史的背景は史実に基づき描き、ネーデルランド特に南部のフランドル地方の描写が魅力に満ちている。ブリューゲルを取り巻く歴史上の人物たちもしっかり描いていて、ボクは秘かにブリューゲルを知る最良の入門書だと思っている。フェレメレンはこの小説の冒頭で、ブリューゲルは少年時代に、異端審問でスペイン兵に絞首台に吊るされた三人の男女の処刑風景を見ていると設定している。その時のデッサンこそが、最晩年の『絞首台の上のカササギ』（一五六八年）に結実したと描く。この絵は、遺言に従って妻マイケンの手に残された。ブリューゲルは死ぬ前に、時代批判的な内容を持つ一連の作品を処分したといわれている。同時代の唯一の伝記を書いたファン・マンデルは《ブリューゲルは、カササギによってロさがない人々を表し、それを絞首台に送った》と記述しているが、ブリューゲルは何を告発しようとしたか。スペインの権力者だったのか、それに内通する密告者だったのか、殺し合う人間そのものだったのか。フェレメレンは、支配者と癒着したカルブ枢機卿とブリューゲル解者であり、的存在でもをしてこういる～《ブルは決してはならない く事が出来ブリューゲ語らない。には、光にしい森と絞で楽しく踊と絞首台のるカササギている。『絞首台のサギ』が観な。

『ブリューゲル展画家一族150年の系譜』は、日（月）まで、札幌市南区芸術の森美術館（目七五番地11・590）で開催される。

（清水